

老舗の次女とチョウ

大勝 勝

屋敷内の一角に三坪余りの畑がある。あと一年で後期高齢者の仲間入りする恭子は、菜園で野菜やお花を作るのが趣味の一つだ。表の空気を吸いながら体を動かすのは、健康維持のためにもなると思っている。自家製の野菜を料理するのも、部屋に季節のお花を飾るのも好きだ。

四月の晴れた日の午後、彼女はナスやキュウリの苗を植える予定の場所を耕していた。庭の中を黄色の大きなチョウが飛んでいた。

恭子はチョウに興味が無かった。

日野恭子は福井市の商店街で、三代続く陽乃屋金物店の二姉妹の妹だ。二つ上の姉は二十一歳で隣の会社員へ嫁いだ。恭子は中背の健康的な小麦色で人並み以上の器量に恵まれていた。縁談も数件寄せられた。彼女は婿養子を迎えて店を引き継いでくれることを身内から期待されていた。恭子もそれは自分の宿命だと心

得ていた。

彼女は二十二歳の時、母の知人に紹介された青年と見合いし、婿取りした。

父は次期店主と見込んだ婿にゆっくり懇切に仕事を教え込んでいた。父の楽しみは大相撲のテレビ観戦で、北陸にゆかりのある力士を熱心に応援していた。

恭子は二十三歳で女兒を出産し〈絵梨〉と命名した。しかし程なく婿は、

「私には店を引き継ぐ能力が無いことが分かりました。お互いに人生をやり直しましょう」

と言った。恭子や両親、親族を説き伏せた気分のようなだった。彼は女の勘の鋭さを知ることなく、絵梨を置いて出ていった。

恭子は店を手伝ったり、両親の支援を受けたりして懸命に絵梨を育てた。姉も時々応援に来てくれた。彼女は母子の行く末を案じ、

「婿取りにこだわらず、良いご縁があつたら絵梨を連れてお嫁にいつてもいいのよ。店は私達が跡を継いでも良いから」と言つてくれた。恭子は少し肩の荷が軽くなつたような気がした。

絵梨が幼稚園に入つて暫く経つたある日、

「絵梨にはどうしてお父さんがいないの?」

と恭子に問うた。

「お父さんはね、絵梨が生まれて直ぐに病気で亡くなつたの。前に話したことなかつたかな? じいじがお父さんの代わりのように頑張つてから心配しなくていいのよ」

と、恭子は即答した。それは予め用意してあつた答えで、両親や親戚などには口裏合わせがしてあつた。絵梨は納得したようである、その後、その話に触れることはなかつた。

絵梨は小学校二年の頃から登校拒否(当時不登校という言葉は余り使われていなかった)が始まつた。それでも彼女は教科書で熱心に自習した。時たま理解出来ないことに悩み、恭子に質問した。恭子はよく分かるまで入念に教えた。絵梨は教科書以外の百科事典、理科図鑑、社会科図鑑にも興味を持ち、よく見ていた。

恭子はより良く環境を変えたい、と転居を考えた。以前、テレビで見た(北陸の住みよい里山の町 特集)で石川県白山市の片田舎が頭の隅に残っているのを思い出した。彼女は大きな地図をパツクした石川・加賀のガイドブックを書店で見付け購入した。それには白山市の詳細も載つていて、テレビで放映されていた地区の見当が付いた。

秋晴れのある日、恭子は絵梨を連れ、電車とバスを乗り継ぎ、テレビで紹介されたことのある集落を訪れた。田んぼ、田んぼ、

畑、田んぼ……伸びやかな山あいの田舎町だった。小川の水は清く川底まで澄んで見えた。所所に藻草が揺れていてその中を濃い黄緑の魚が出入りしていた。

「あつ、フナかな?」絵梨は図鑑で見たことのあるフナだろうと思ひ、興奮していた。都市部では見掛けたことのない景色に喜々として眼を輝かした。恭子は近くの役場に入り、受付の女性に尋ねた。

「以前にテレビで、住みよい里山の町を見てこの辺に興味を持ったのですが、お話を伺えないでしょうか?」

彼女は「はい、どうぞ」と言つて簡素な衝立で仕切られたスペースに案内した。テーブルと椅子が四脚並んでいた。

「担当の者を呼びますのでお掛けになつて少々お待ちください」彼女が出ていくと間もなく恭子と同年代に見える長身の男性職員が入つてきた。

「お待ちせしました。地域振興課の大月智也と言います」

差し出された名刺を恭子は恭しく受け取つた。明るく快活な職員にみえた。

「お忙しいところすみません。福井市から来ました日野恭子と申します。この子は一人娘の絵梨です」絵梨は「こんにちは」と挨拶してぴよこんと頭を下げた。

「絵梨さんは何年生?」

「二年です」

「あ、そふなんだ」

大月は恭子に向かって言つた。

「遠いところわざわざ訪ねてくださつて有り難うございます。あのテレビ放送の後、時々お見えになる方があるのです。こちらは静かで水も空気も奇麗で人情も厚く、別荘や移住を検討されている方々に関心を持たれています。この辺りのパンフレットも作

りましたので一部お持ちください」

恭子は「有難うございます」と受け取ってから言った。

「とても素敵な地区ですね、県外からの移住者もいらつしやるのですか？」

「はい、関西や中京方面から移つてこられた方が多数います。

レストランや喫茶店を始めた若いカップルや、会社を定年後、終の住処として移住されたご夫婦もいます」

「豊かな自然で本当にいい所だと思います。……ただ……大変不仕付けな質問を許して頂きたいのですが……こちらに移住することでのデメリットみたいなものはあるでしょうか？」

大月は意表を衝かれたように一瞬口籠った。今までに受けたことのない問いだったかもしれない。

「……そうですね……デメリットね……まあ、市街地からみると昆虫類が多いと思います。この苦手な方にとつてデメリットになるでしょうね。それから、スーパーマーケット、病院など少し離れていますので、車が無いと不便だと思います。一応バスは通っているものの、本数が少ないのです。それと、冬は平地に比べ積雪が多めです。早朝から除雪車が出ますがそれでも交通障害がありそうな時は対策しなければなりません。あと、井戸端の好きな人もいますので、それが嫌な方としてはデメリットでしょうね。そういう人には余り関わらなければいいのですが」

「大変参考になり、有り難うございました。私、古民家に興味があるのですが、空き家などあるでしょうか？」

「はい、数軒登録されていますので何時でもご案内します」

絵梨が恭子に小声で耳打ちすると恭子は言った。

「すみません、トイレを貸して頂けないでしょうか？」

大月は近くの女性職員にトイレを案内させた。トイレの近くまで来ると「こちらです、どうぞ」と言つて立ち去った。色白で鼻

筋の通つた上品な職員だった。

やがて二人は元の場所に戻つた。

「どうも失礼しました。今日はお忙しいところ大変有り難うございました。よく考えてから、またお伺いしてもよいでしょうか？」

「はい、なんどきでもどうぞ。こちらは過疎化防止のため転入される方を大歓迎しています。納得いくまで十分検討してください」

恭子は大月を誠実で正直で頼り甲斐のある職員だと感じた。

恭子は一応普通車の免許を持っているのだが、殆どペーパードライバーに近かつた。彼女は時々父の車を使つて運転に慣れるようにした。

恭子は初めて白山市を訪れた二週間後、事前に大月に古民家の案内を依頼し絵梨と役場へ出向いた。大月は役場の公用車で連れていつてくれた。途中、彼は一旦停車し、

「右手のレストランは大阪から移住された方が経営しているのです」

と説明した。《レストラン手取》という看板が掛かつていた。

暫く走つてから、また車を止め、

「この喫茶店は《喫茶いこいの里》といって、名古屋出身の方が開いたものです」

と話した。

間もなく目的の空き家に行き着いた。

「こちらは私も気に入っているお勧めの物件です。築二十五年で耐震性も優れています」

彼は賃貸の場合の家賃と敷地込みで購入する場合の価格を明示してくれた。恭子はそれを手帳にメモした。

家は二階建てで大きさは中くらいだった。

「写真を撮ってもいいでしょうか？」

と恭子が言うと、大月は「構いません、どうぞ」と返答した。

家の周囲を一回りしてみた。敷地は余裕があった。駐車するスペースも十分あった。恭子は所所で写真を撮った。

「家主さんから玄関のスベアキーを預かっていますので中もご覧ください」

恭子と絵梨は大月に付いて中に入った。柱や天井には珍しく赤色の漆が塗られていた。まだ十分使用出来そうな一部の家具や照明器具など付属されたままだった。緩やかな階段を上がって二階も見学させてもらった。窓からは近くの山の上に遠くの名峰白山の頂上部が見えた。

その後、大月が二番目、三番目にお勧めの物件を案内してくれた。

恭子は見学した三軒の空き家の中で、最初に見せてもらった赤い漆塗りの民家が最も心に適った。

「いつか小学校を見せてもらってもいいでしょうか？」

「いいですよ、いつでもご案内します」

帰りに絵梨が「バイバイ」と言うとき大月はこやかに手を振って「またね」と言った。

一週間経った頃、恭子は絵梨を連れ、大月に小学校を案内してもらった。学校は山の麓にあった。絵梨が入学した福井市街の鉄筋コンクリート造三階建てのものよりこじんまりとした木造二階建てで温かい感じがした。

「中に入ってみたいですか？」

「……そうですね、……できましたら……二年生の教室辺りを廊下の窓からでもちよつと……」

「では校長先生に話してきます」

恭子と絵梨は校庭の花壇に眼をやりながら待った。暫くして大月が戻ってきた。

「いいそうですね、どうぞ」

と言った案内してくれた。一学年が一クラスだった。教室内の児童の数はそれ程多くなく、楽しく、明るい雰囲気を感じられた。

「いつも大変お手数掛けてすみません」

と、恭子は謝意を表した。

「いいえ、どういたしまして。これも私の仕事の内ですから気にしないでください」

十日余り過ぎた頃、絵梨は、

「私、あの赤いお家に住みたいな。そこから、お山の麓の学校に通いたい」

と言いつ出した。

「そうですね、奇麗なお家だったし、学校も良かったわね」
恭子は逆らわなかった。

恭子は次第に白山市への移住に気持ちが傾いていった。

やがて彼女はその意志をほぼ固めると、両親に写真を見せながら説明した。親の承諾を得るためではなく、報告のつもりだった。

一週間後、父の運転する車で、恭子は母や絵梨と共に現地におもむいた。恭子は車の運転に大部慣れたが、まだ遠出は出来なかった。

恭子が大月と何度か会っている内に、彼は移住とは関係のない個人的な話もすることがあった。

「私は卓球が好きで中学の時、クラブに入っていたんです。大月では社交ダンスクラブで楽しんでいたのですが、今はもう出来

るかどうか分かりません。日野さんはダンス好きですか？」

「いえ、全然駄目です。卓球は私も好きで中学時代クラブ活動していました」

ある日、絵梨が思い詰めたように言った、

「役場のあの小父さん、私のお父さんになつて欲しいなあ」

「えっ？ お父さんに……」

恭子は考えたこともなかったことを突然言われて面食らった。

「だって、あの小父さん、大月さんっていうんだけど、奥さんも子供さんもあるかもしれないのよ」

絵梨は「ふーん」と言つて黙りこくつた。恭子は思い出してみれば、大月が独身か所帯持ちか知らないままだった。例えば独身だとしても、離婚歴がある上に子持ちの自分には関係ないことだと思つた。しかし、何処か引つ掛かる気持ちが頭の片隅に生じ始めた。

恭子は大月と軽い会話を交わしていた時、さり気無く言つた。

「大月さんの奥様もこの地方の方ですか？」

「いやあ、私は未だ独り身です」

「あら、そうなの」

その後、特に続く話はなかった。

数日後、恭子は大月に手紙を書いた。

「へこんには、何時もお世話になり有り難うございます。人の耳のある所では話せなかった個人的なことを書いてみます。ざつと読み流してくださいければ結構です。……」

という書き出しで、自分の生い立ち、家族、婿養子取り、出産、離婚（絵梨には死別と説明）、絵梨の登校拒否について淡々と綴つた。自宅の住所、電話番号も明示した。大月の住所を知らない

ので、名刺を見ながら役場へ茶色の封筒に入れて投函した。

十日後、恭子の元へ大月から手紙が届いた。前から知りたいと思つていたことの殆どがクリアになつて嬉しかったという内容、彼の生年月日、住所、電話番号も記されていた。大月はサラリーマンの家庭の次男で恭子より二つ年上だと知つた。

その内、恭子は絵梨と白山市への移住を決断し、家族や親族、そして大月にも伝えた。

恭子は古民家の賃貸契約や移住の手続きなど順次進めていった。大月も何かとアドバイスしてくれて心強かつた。恭子は大月が入りしている車屋さんを紹介してもらい、気に入つたグレーの中古軽乗用車の購入を決めた。

運送業者に依頼した引越の日、恭子の父と義兄が力になつてくれた。恭子は移転の予定日を予め大月に知らせておいた。人手は十分なので心配ないことも付け加えた。予約してあつた軽乗用車も届いた。

移住後、大月が顔を見せ、

「何か困つたことでもありましたら何時でも連絡してください」と声を掛けてくれた。それも彼の仕事の内か、それとも個人的な思いによるものか、恭子には分からなかった。

一箇月後の休日の前日、大月から、

「明日、もし都合がございましたら『喫茶いこいの里』で会つて頂けませんか？」

と電話があつた。

翌日、『いこいの里』の奥まつた席で大月が待つていた。オー

ダーしたコーヒーが運ばれた後、彼は言った、

「日野さん、私と家族になってください、お願いします」

「えっ？ 家族？」 恭子は、突然の言葉に一瞬意味が分からなかった。が、それがプロポーズだと悟ると、心臓が一度ドキンとした。

「……私のような身の上の者はあなたと釣り合いが取れません」と、しどろもどろに言った。

「釣り合いの問題ではありません。芯の強い中にも淑やかさを感じるあなたの人柄が好きです。絵梨さんのいい父親になれるようにも努力します」

恭子は二週間熟慮した結果（こんな良い話はない、これを逃がしてはいけない）という思いになった。恭子はこのことを絵梨に話すと、彼女は大喜びだった。恭子は叶わぬことと知りながら、心の底で勝手に空想もしていたことがあったのに気付いた。

大月は恭子から快報を受けた一週間後に福井市の彼女の実家を訪れ、両親に挨拶した。恭子の姉夫婦も同席していた。

その十日後、恭子は絵梨を連れて大月の二親に挨拶した。

恭子と大月は、地域が管理している施設で挙式した。その日は梅雨晴れだった。恭子の両親も姉夫婦も新しい家族の前途を祝福し、安堵の胸を撫で下ろした。

恭子と絵梨は姓を大月に改めた。大月は自分の荷物の搬入を終えていた。三人がお気に入りの赤い古民家で、新しい生活が始まった。大月は民家の賃貸契約を解消し、敷地ごと購入した。彼は知人が経営する工務店に頼んで、家の前に車三台格納出来る車庫を設置した。

大月は絵梨を実の娘のようによく可愛がった。彼女は父親の愛

というものに飢えていた分、一気に挽回しようとしているかのように見える。

大月は恭子との間に子供が授かれれば良し、もし授からなければそれは仕方がない、と恭子に言っていた。彼女もその心組みをした。

絵梨が三年生の一学期が終わる前、恭子と大月は絵梨の転校の手続きを終えた。

夏休み中、大月絵梨に友達も出来た。二学期の始業式から彼女は転校生として登校した。

恭子は〈レストラン手取〉でパート勤務していたのだがそのまま続けた。彼女は料理が好きだ。少し自信もある。大月はいつも美味しいと満足している様子で恭子は喜んでゐる。彼は付き合い程度の酒は飲めるが晩酌は殆どしない。

結婚して二年半程経った頃、大月が土曜日の業後、職場の忘年会があり温泉旅館に一泊した。その夜、絵梨は酷く寂しがった。それは恭子も同様だった。

雪の少ない年が明けて一週間後、恭子が畑で大根を抜いていると、垣根越しに顔見知りの小母さんから声を掛けられた。特に親しくしている訳ではないが役場の職員の連れ合いであることは知っていた。

「お宅の旦那さん、なかなかやるねえ」

と話が始まった。

職場の忘年会で広間の宴会が終わると、大月は館内のダンスホールで社交ダンスを楽しんだ。相手は彼よりいくつか年上の独身女性だ。色白で鼻筋の通った上品な職員だった。陰ではお局さんと言われ、誰もが何となく近寄り難い存在だった。大月とお局さんの取り合わせに眼を見張った者もいた。その後館内のカウンタ

バーの端で仲睦まじく飲み直していた。(あの二人、出来るんじゃないか)と疑う者もいたらしい。お局さんにとっては退職する予定の前の最後の忘年会だった。バーの後の二人の行動を知る者は誰もいなかった。同室の職員は大月が部屋に戻ったのを知らなかった。それでも朝、皆と一緒に起き、朝食を摂って解散となった。

と、これは小母さんの話だった。

その夜、恭子は顔に出さなかったが激しい嫉妬心に苛まれた。自分には出来ないダンスを他の女に求められたことが悔しかった。そのことについて彼女は大月に一言も触れず胸に仕舞った。恭子は家庭生活で波風を立てたくなかった。二度目の離婚につながるようなことは極端に恐れた。

恭子は子持ちで離婚歴のある自分を貰ってくれた大月に感謝してきた。彼に対して引け目も感じている。大月が何時までも心に残る思い出の忘年会となつても良いのではないか、と思えるようになった。その後、彼の浮ついた話はなかった。

絵梨は大月を慕い、小学校高学年近くまで彼と一緒に入浴することがあった。転校してから彼女の登校拒否は一度も無かった。

絵梨は恭子似の美貌に恵まれた。彼女が十八歳になった時、恭子は言った。

「絵梨の実のお父さんは病気で亡くなったのだと言つてたけど、本当は絵梨が生まれて直ぐに訳あって離縁し、陽乃屋金物店から出ていったの」(女が出来たらしくて)とまでは言わなかった。

絵梨は「ふーん、そうなの」と言つて恭子が予想していた程のショックがないようだった。それは大月を敬愛し、実父というものに余り関心が無かつたせいだ、それとも既に何者かに入れ知恵

され、真実を知つていたせいだ、恭子には分からなかった。偶然にも実父の血を引く者と恋に陥り、濃厚な近親婚になるようなことは避けたい、と恭子は思っていた。彼女は前夫の氏名、生年月日、当時の住所を記載したメモを絵梨に渡した。

絵梨は二十六歳で商社マンと結婚し、金沢市内に家庭を持った。恭子と大月の間に子宝は恵まれなかった。大月は一人娘を嫁がせた父親の寂しさをひしひしと感じたようだった。恭子は移住という生活の変化が少し怖かったが、これで良かったと思つている。彼女は「ヘストラン手取」でのパート勤務を既に辞めていた。

課長職になつていた大月は六十歳で定年退職となつた。その後役場からの要請を受け、嘱託職員として若手の育成に務めた。彼は六十三歳でリタイアし共済年金生活となつた。

大月が退職して数年後、町内会から請われて、彼は役員になつた。

恭子と大月は運動不足防止を兼ねて時々公民館で卓球を楽しんだ。二階が多目的ホールになつていて卓球台が三台常備されている。自前のボール、ラケット、ズック靴などで町民は自由に使用出来る。二人は長くラリーをするのが好きだ。

ナスやキュウリ用の畑起こしが大方終わった時、大月が公民館から帰ってきた。彼も畑作業をすることがあるのだが、その日、町内の役員会があつたのだつた。

「ただいま、お、畑起こしご苦労さんでした。きれいに耕したな」

「お帰り、お疲れ様でした。直ぐコーヒー入れます」

二人はエクレアを口にしながらコーヒータイムを楽しんだ。

二箇月後、はじめと蒸し暑い梅雨のある日、夕方、台所にいた恭子が、突然叫んだ。

「キヤー、ムカデー」

右手にゴミ拾い用トング、左手に殺虫剤のスプレーを握り締め、大月が駆け付けた。恭子が震えながら指差した台所の隅っこで進路を迷っているかのようにもぞもぞしているムカデを眼にした。

「なんだ、Sサイズか」と彼は独り言を言いながらプシューと殺虫剤を吹き付け、動きの止まったムカデを始末した。

恭子は大月を頼もしく思うことが数多くある。彼女の大嫌いなムカデを沈着に退治してくれるのもその一つだ。

ある雨の日に恭子は、大月と卓球のラリーを楽しんでいた。暫くやっているとなれば突然スマッシュした。彼女は運動神経も衰えていて咄嗟に返球するようなことは出来なかった。もし大月にストレスが溜まっていてスマッシュで解消出来るのならそれでも構わないと恭子は思った。彼女は負けじ魂でスマッシュすることはなかった。

大月はテレビを見る時、以前よりボリウムを少し上げた。恭子が何か話し掛けた時、「えっ?」と聞き返すことが多くなった。もしかして聴力が落ちたのではないかと恭子は心配し、耳鼻科での診察を勧めた。彼は少し自覚していたのか、素直に受けて応じた。

恭子は大月が医師の話をきちんと聞き取れるか気になって、一緒に診察室に入れてもらい、片隅の丸椅子に掛けた。

医師は看護師の取った測定データを見ながら診察した。

「加齢による軽度の難聴です。現在治療の方法がありません。日常生活に支障を来すようになったら補聴器を付けければよいでしょう」

と言って推薦する専門店の散らしを渡してくれた。

大月は高齢を理由に町内の役員を辞退し年下に譲った。ある日、恭子は少し尿意を感じていたが、洗濯物を取り込んでしまおうとサンダルを引つ掛けて表に出た。微風に吹かれて尿意は次第に強くなったが我慢していた。その内限界を感じ、急いで玄関にサンダルを脱ぎ捨ててトイレに駆け込んだ。用を足している時、たまたま玄関へ出た大月がサンダルに眼がいったらしい。後で彼は言った。

「玄関に履物を散らかすのは見苦しいよ。そこは家の顔とも言われることがあるんだから……」

「すみません、今度から気を付けます」

恭子は言い訳などせずに謝った。これからは余裕を持ってトイレへ行こうと思った。

数日後、恭子はピーナッツを食べながら大月に話し掛けた。すると彼は、

「口に物を入れて喋らないでくれ。良く聞き取れないんだ」と膨れた。彼女は「はい、すみません」と詫びた。大月が難聴気味なのを恭子はいくつか忘れてくれることがある。

絵梨は時々親の様子を見に来てくれる。彼女が来た時、恭子は、「お父さんは年取ると共に短気で口喧しくなるのよ」と愚痴をこぼした。その殆どは自分の手落ちに起因するのだが、絵梨に少し甘えてみたかったのだ。

数週間経った頃、大月は転倒して骨折し、金沢の病院に入院した。絵梨は、

「口煩いお父さんが居なくて束の間の平穏を味わっているんじゃない?」

と言った。

「そんなことないわ。寂しくて寂しくてしょうがないの。一人で居るのってとても心細いものよ」

恭子は金沢の病院まで車を運転する自信が無い。彼女は絵梨の車に乗せてもらって週に数回、洗濯物の受け渡しのためだけに通った。コロナ禍の時は、面会を許可しない病院が全国的に多かったが現在はいくらか緩和されている。それでも「こんな無様な格好は見られたくない」と大月は面会を嫌がった。絵梨が言った。

「洗濯物は私に任せてもいいのよ」

「いえ、運の良い時は詰所をうろうろしているお父さんが見られるんだから」

と恭子は嬉しそうに言った。

大月は一週間後に退院出来る予定になった。恭子はそれが待ち遠しい。あと数年で二人は金婚式を迎える。長く共に暮らすことによって互いに理解し、許し合い、存在がとてつもなく貴重なものになっている。昔からよく言われている「噛めば噛む程味が出るスルメのような夫婦」でありたい、と恭子は思っている。もし大月が認知症になって、すっかり人格が変わり果ててしまうようなことがあったら、(新しい彼氏が出来た)と思うようにしたいと彼女は考えている。

陽乃屋金物店を姉夫婦が継いでいた頃、恭子の両親が他界した。今、姉の長男が五代目となって精励し業績を伸ばしている。

ある晴れた日に、恭子は畑の草むしりをしていると、二匹のアゲハチョウが飛んできて暫く側から離れなかった。数日前、チョウは亡くなった人の魂を運んで来るのだと聞いた。両親は恭子が幸せに暮らしているだろうか様子を見に来たのだ、と恭子は思った。(私は幸福な暮らしをしているから安心してください。それと、お父さん、石川県から五十二年振りに横綱が誕生したよ)と胸中で念じた。もし、恭子は大月の先に逝ったらチョウに乗って

彼を慰めに来ようと思う。大月の方が早く逝ったら、きっとチョウに乗って(そろそろこちらへ来いよ)と招いてくれるに違いないと恭子は思っている。

